

聖書：ローマ8：5～13

説教題：御霊に従う者

日時：2015年11月1日

パウロはこの8章で「クリスチャンの救いの確かさ」というテーマで話を進めています。私たちは日々様々なことに翻弄されながら生きています。絶えず変わる状況の中で明日はどうなるか分からないと感じたりします。あるいはすでに自分は大変な苦境に投げ入れられたと知っている人もいるでしょう。果たしてこんな私たちに確実なことが何かあるのでしょうか。そんな私たちに、この章はクリスチャンが生かされている不動の恵みについて語っています。この章のキーワードは「御霊にある」ということです。これと対照的な言葉は「肉にある」という言葉です。ここでのパウロの言葉によれば、人間には2種類しかありません。すなわち「御霊にある人」と「肉にある人」の2種類です。私たちはこのどちらかに必ず属しています。そしてこの「肉に従う者」と「御霊に従う者」とはどんなに違うか、その対比を彼はまず今日の箇所ですべて述べています。

「肉」とは何でしょうか。「肉」とは罪によって墮落した人間性のことです。これは御霊によって新しく生まれる前の、生まれながらの人間の状態とも言えます。そういう人はもっぱら肉的なことを考えると5節にあります。そして6節に「肉の思いは死であり」とあります。なぜそうなのか、その理由が7節に「というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです」とあります。神はいのちの根源なるお方です。ですからその神に対して反抗し、神を否定して生きようとする態度はイコール死となるわけです。この肉の思いは神に対して反抗しますから、神の律法に服従しません。いや罪の力に牛耳られ、がっちり捕らえられているため、服従できないのです。従って8節にある通り、神を喜ばせることができません。

もちろんすべての人間は墮落以後も「神のかたち」として、神を映し出す輝きを放っています。クリスチャンでない人々にももちろんすぐれた素晴らしい光が輝いています。神がなお私たちを人間として保っていてくださるからです。しかしもし生まれながらの状態のままなら、すなわち肉にある者なら、そこにある本質原理は神に対する反抗です。従って神には喜ばれない。むしろ自分を神から切り離して生きようとするため、すでに霊的な死の状態にある。そしてそのままでは最終的な死、すなわち永遠に神から切り離される最後の死に至ろうとしています。

これと対照的なもう一方の人々は「御霊に従う者」です。こちらの人は御霊に属することをひたすら考えます。御霊の働きの第一は何と言ってもイエス・キリストの栄光を現わすことです。ですから御霊に導かれる人は、イエス・キリストの素晴らしさに目を開かれ、この方を礼拝し、賛美する人です。そしてイエス・キリストの素晴らしさが分かる人とは、この方を私たちに送ってくださった父なる神の素晴らしさも良く分かる人でしょう。従ってその人は神中心の生活をする人となります。あるいは御霊の思いは聖書に余すところなく記されています。従って御霊に属することをひたすら考える人は、「聖書の光のもとですべてを考える」人であるとも言えます。この御霊による思いは「いのちと平安」と6節にあります。御霊に従って生きる人は神との正しい関係に生きる人ですから、その人に神からのいのちが豊かに注がれるのは当然です。またその人は平安を持ちます。神との平和に基づくたとえようもない平安を心に抱く人へと導かれるのです。

パウロはこう述べた上で9節から、手紙の読者に向かって「あなたがたは御霊の中にいるのです！」と語ります。新改訳聖書は9節を「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら」という部分を先に持って来て訳していますが、原文では「あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです」という言葉が先に来ています。ここには8節までの対比があります。7～8節では肉にある人のことが述べられました。それに対してパウロは「しかし、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです！」と宣言しているのです。そして新改訳は「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら」と訳していますが、これは直訳としては間違いではありませんが、そのニュアンスは誤解されやすいと思います。パウロはここで「もし」と言っているからと言って、この手紙の読者たちのうちに御霊が住んでいるかどうかを問うているではありません。パウロはむしろ御霊が彼らの内に住んでいるなら、それは何を意味するかという結果に注目させたいのです。ですから「御霊が住んでおられるなら」という部分は「御霊が住んでいるのですから」と訳した方が、よりそのニュアンスははっきりします。9節を訳し直すようになります。「けれども、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるのですから。」

しかしなぜ神の御霊があなたがたのうちに住んでいると確言できるのでしょうか。その理由が9節後半にあります。「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。」パウロが言っていることは、御霊を持たない人はキリスト者ではない

ということです。言い換えればキリストを信じている者はみな御霊を持っているということです。I コリント 12 章 3 節：「聖霊によるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません。」

この御霊の中にある人の祝福が 10～11 節に述べられています。10 節：「もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。」 私たちのからだは罪のために死すべきものとなっています。クリスチャンになってもこのからだの死から逃れることはできません。みな一度は死ななければなりません。これは罪の結果です。しかし「霊が義のゆえに生きています」と言われています。これはどういう意味でしょうか。ここの「霊」という言葉は「御霊」と訳す方が良いと思います。ここで使われているギリシャ語のプニューマという言葉は、人間の霊も、神の御霊も指し得る言葉ですが、ここは前後の節と同じく「御霊」を指していると考えられます。つまりパウロの言っていることは、私たちのからだは死すべき運命から逃れられないが、そこには御霊が生きていますということです。キリストを信じて義とされた私たちの内には、御霊が生きています。それゆえに 11 節の言葉が続きます。「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。」 すなわちキリストの復活において御霊が大きな働きをしたように、私たちのからだについても御霊は「生かす」という働きを必ずしてくださるということです。私たちはこの地上で、このからだを持つ者として様々な弱さを経験しています。年をとり、老いて行く経験をします。そしてやがて死ぬという定めを逃れることはできません。しかし慰めは、私たちのからだには御霊が住んでいてくださるということです。ですからたとえ一度は死の下に身を沈めなければならないとしても、内に住む御霊がその死をもやがて凌駕し、私を生かしてくださる。この死ぬべきからだをも生かしてくださる。御霊はこのような力をもって私たちの内に住み、みわざをなしていてくださるのです。いのちをもたらす御霊として、最後にはいのちが勝利する状態へと私たちを確実に導いてくださるのです。

このような御霊の圧倒的な祝福のもとにある私たちは、どのようにこの恵みに答えて歩むべきでしょうか。私たちの応答について最後 12～13 節に記されています。まず 12 節：「ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはい

ません。」 私たちは以前は肉にある者たちでしたが、今はそこからは解放された者たちであり、今や肉に対しては何の義務も持っていない者たちです。解放された奴隷が、以前のご主人に仕えなければならない理由はありません。私たちに負うべき責任があるとすれば、それは私たちの新しい主人である聖霊に対する責任でしょう。そういう私たちであっても、肉に従って生きるなら、13 節にあるようにそこに待っているのは死です。肉に従う歩みにいのちはないのです。

むしろ私たちが取り組むべき課題は 13 節後半に示されています。それは御霊によって歩むことです。しかしただそう言われているのではなく、御霊によって「からだの行ないを殺すなら」と言われています。これはどういうことでしょうか。これはすでに 6 章 12～13 節で言われたことと同じでしょう。「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」 ここにはキリストを信じて御霊の支配のもとに移された信者にも、なお戦いがあるということが示されています。これは私たちも経験しているところでしょう。クリスチャンになったからと言ってバラ色の人間に変わったわけではない。願わないのになお罪を犯してしまう。なぜでしょうか。それは私たちがまだ完全な状態には到達していないからです。救いの最終状態に達していないからです。そういう私たちは自分をどう考えるべきでしょうか。調子が良い時は聖霊の下にあり、そうでない時は罪の下にある不安定な人間と考えるべきでしょうか。クリスチャンになっても罪の奴隷状態に戻る可能性があるのでしょうか。パウロはそのことを強く否定して来ました。今日の箇所 9 節でも「あなたがたは肉の中ではなく、御霊の中にいるのです」と宣言されていました。2 節にも、私たちはいのちの御霊の原理の下にあると言われました。キリストを信じた者は、御霊が支配する領域に一度限り、決定的に移されたのです。この事実を認識し、そこにしっかり立ってこそ、私たちは残る罪との戦いに取り組めるのです。

ここに「からだの行ない」とあるように、以前の肉の思いに従おうとする傾向は、私たちのからだの諸部分、すなわち目、耳、口、手、足などの使い方に現れて来ます。これらのからだの諸部分を御霊の思いに反して、肉の思いに従って用いようとする傾向が私たちのうちに残っています。その時、どうすべきでしょうか。ここで言われていることは、それらを「殺す」ということです。それらを「死なせる」ということです。もし

目が良くないことのために使われようとするなら、目を閉じる。イエス様はその目を「えぐり出して捨ててしまいなさい」と言われました。もちろんこれは文字通りにそうしなさいという意味ではありませんが、まさに目をえぐり出した者のように自分を考えて悪いことのためには使わない。それが殺すことです。同じように良くないことが聞こえて来るなら、耳を急いで閉じる。悪いことのために開こうとせず口を閉じる。誘惑になりそうなものは手にしない。そういう場所には足を向けない。そのようにする時、私たちの中の古い性質は唸り声を上げるかもしれません。しかしそれを殺すという取り組みがここで述べられているのです。

世の中の人々が聞いたら、クリスチャンとは何と堅苦しい人々か、何と不自由な人たちかと思うでしょう。クリスチャンである私たちも、随分厳しいことが求められているなあと思うかもしれません。しかし素晴らしい約束に目を留めたいと思います。ここに何と書いてあるでしょうか。このようにしてからだの行ないを殺すなら、「あなたがたは生きる」とあります。すなわちそこにこそ、私たちは真のいのちを体験するということです。確かに戦いの中で肉の思いに身を委ねる方が簡単です。戦わない方が楽です。その時、一時的な快楽は得られるでしょう。しかしそこにいのちはあったでしょうか。一時的な肉の満足と引き換えに、私たちはいのちを失うのです。本当の喜びから離れ、死の道を進むのです。しかしそこで戦ってからだの行ないを殺すなら、あなたがたは「生きる」と言われている。これは激しい戦いに臨もうとする私たちにとって、大いなる励ましです。そして聖書が述べていることは、私たちは御霊の下にある者としてこのことができるということです。以前とは異なった恵みの状態にある者として、御霊によってできるということです。

私たちは自分が今やこの強力な御霊の支配のもとにある者とされていることを感謝したいと思います。しかしこのことは、私たちは何もしなくて良いということを意味しません。私たちは今や聖霊に信頼してなすべきことがあります。それは御霊によってからだの行ないを殺すことです。御霊に信頼し、御霊に祈りつつ、なお湧き上がって来る肉の思いと戦い、からだの行ないを一つ一つ殺すことです。その時に「あなたがたは生きるのです！」とここで約束されている祝福に私たちはあずかるのです。この世のどんな喜びよりもはるかに深く私たちを満たすいのちの喜び、やがての天国のいのちを先取りし、そこに通じるいのちの喜びに生きる者へと導かれるのです。